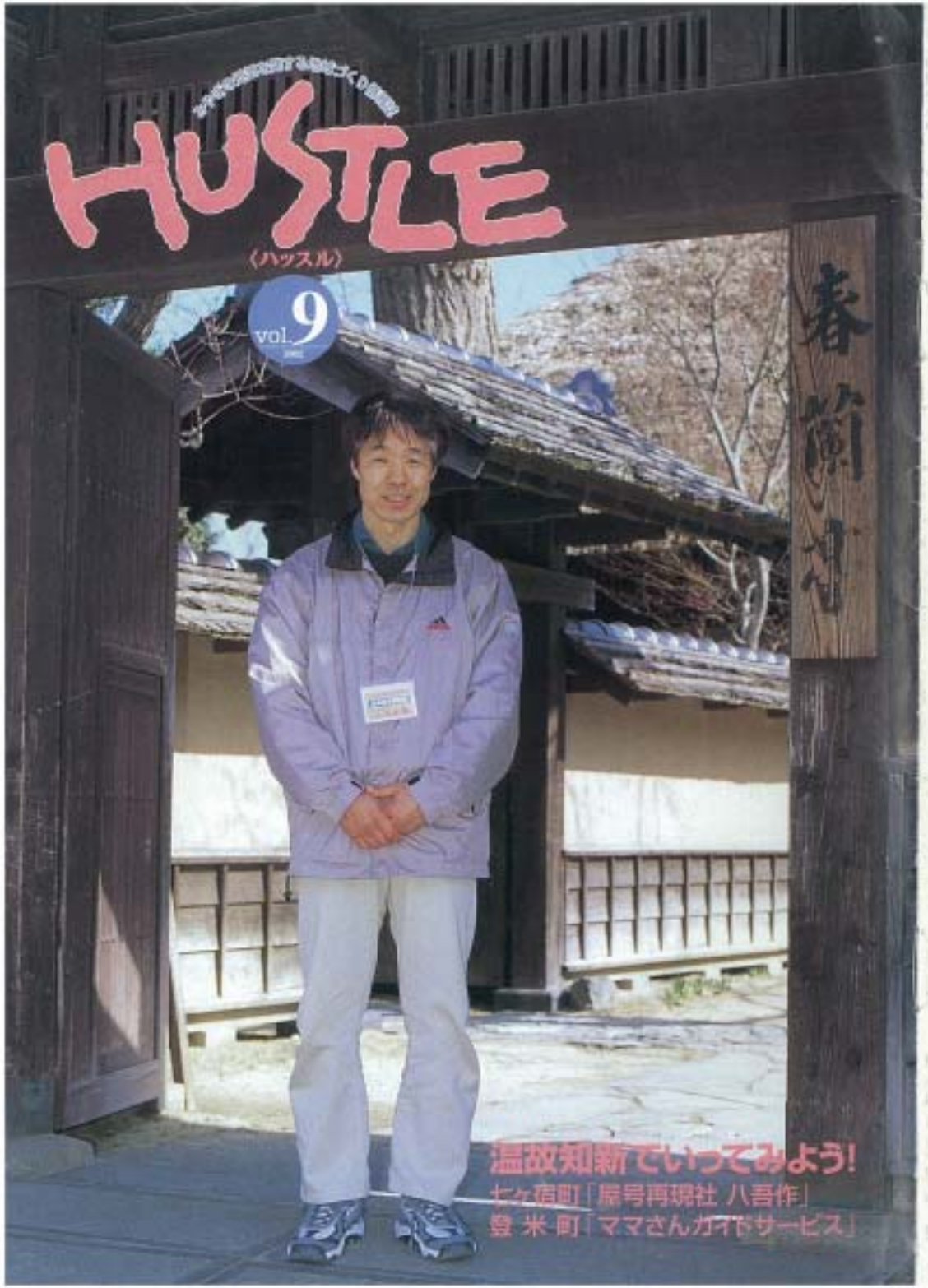

「HUSTLE」とは、

直訳すると"積極的な活動"とか"元気"。
それが「Hustle」(ハッスル)、つまり地域の活気を意味しています。
また、情報を"発する"という意味も込められています。
地域の活き活きとした暮らしや魅力を伝える地域づくり情報誌です。

HUSTLE (ハッスル) vol.9

ハッスルからみなさんへ

HUSTLEvol.9はいかがでしたか?
　次号も話題盛りだくさんでお送りする予定です。ご期待ください。
　さて、読者のみなさんへお願い。HUSTLEは、みなさんの「声」をお待ちしています。「ハッスルを持って遊びに行ってきたよ」とか「こんな話題を特集してほしい」など、何でも結構です。ご意見・ご感想をハガキ、FAXまたはEメールでお寄せください。お待ちしてまーす。(HUSTLE担当)

宮城県企画部地域振興課
〒980-8570　仙台市青葉区本町3丁目8-1　TEL 022-211-2422　FAX 022-211-0205
ホームページ　http://www.pref.miyagi.jp/tisin/
メール　tisin@pref.miyagi.jp

この冊子は20,000部作成し1部当たりの印刷単価は147円となっております。

制作/(株)電力ライフ・クリエイト北海道

Waterless Printing. Naturally
PRINTED WITH SOY INK
環境に優しい大豆油インキを使用しています
R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

しばし、地域の魅力に、触れてみませんか？

温故知新で いってみよう！

いろんなものが、さまざまな事情で忘れられたり、失われていく世の中で、ずっと変わらずに残っているものは、やっぱり、素晴らしい。年月を経たものにしか出せない味わいとか、深みとか、たとえ古くなっても、けっして色あせない価値があるのですね。そんなわけで、今回ハッスルが注目したのは、"地域にしっかりと誇りを持っている人"でした。お邪魔したのは、七ヶ宿町と登米町。お会いした誰もが、「昔ながらの良さを次の世代にのこしていくことは、今を生きる世代の義務」であると、力強く答えてくれました。

山中七ヶ宿街道の再現。

起爆剤は、昔なつかしい屋号看板。

【七ヶ宿町】屋号再現社「八吾作」

思いは一つ、地元を盛り上げなきゃ。

「江戸時代から伝えられてきた屋号看板が町を飾れば、宿場町として栄えた往時の景観を再現できる。さらには、独自の文化を次の世代に継承していける。これはいいぞ」と語るのは、「八吾作」の代表を務める今野三喜男さん。結成のきっかけとなったのは、平成十二年に施行された『七ヶ宿町街なみ景観条例』。この精神に共鳴した町内の有志たちが、いつの間にか集まってきた。「みんなウズウズしてたんだよ。地元を盛り上げなきゃって。で、屋号の話が出たから、それやろうって即決」と、林業を営む小山真光さんが当時を振り返る。町議会議員を務める吉田明さんもメンバーの一人。「江戸時代からの屋号を見直すことは、この町で生まれた自分の存在を考えることにつながる。各自がそれぞれの家について考えれば、やがて町づくりに発展してゆく。つまり、町の活性化にもなるんですよ」と吉田さん。ちなみに看板の主材料となるのは間伐材。地域の地場産業である林業の振興への貢献も忘れてはいない。

結成からまだ二年ほどだが、すでに町内外で一〇〇箇所に屋号看板が誇らしげに立っている。つくる手間、その見栄えからして決して安いものではない。それにも関わらず、「八吾作」への注文が後を絶たないというのだ。

夢はズバリ、産直住宅です。

「結局、みんな町に愛着や誇りは持っているけれど、もう一つカタチにできていなかったということでしょう。でも、この反響の大きさを考えると、まだまだ盛り上がれる要素は潜在していると思ってるんだけどねぇ」と今野代表。出足は好調のようだ。

（写真左より）今野三喜男代表、小山真光さん、吉田明さん。各人とも結成当初からのメンバーとして活動に携わる。発言の端々から、町に対する愛着、活動への熱意がうかがえる。

（写真左より）高橋一さん、鈴木一宏さん。16歳の年齢差を感じさせないほど、お二人の関係はフランク。微ましい限りである。

街の各所に見られる屋号看板。木の温もりが良い具合に風景に溶け込んでいる。「八吾作」のひたむきさが、確実に地域の人々の意識を動かしている。

さて、現在のメンバーは十七名。全員が兼業で『八吾作』を支える。商店を営む森秀一さんは言う。「私は別に何もしてないの。モノ作りは好きなんだけど、作ってないし(笑)。でも、参加してると楽しいんだ。自分らにも何かできるぞって可能性だけで、ワクワクしてくるんだよ」。参加して一年足らずながら、材木業を営む鈴木一宏さんにはメンバーからの期待が高い。「父とかわって参加したんですが、木に携われる喜びは大きいですね。ただ本当、まだ何も貢献してないんで、これから頑張りたいです」と謙虚な鈴木さん。『八吾作』で夢を実現していきたいと熱っぽく語るのは小山さんだ。実は彼、十年前に神奈川から移住してきたIターン者でもある。「僕は欲が深いから、町を盛り上げるだけじゃなく、木をもっと身近なものにして、林業界全体を盛り上げたい。夢はズバリ七ケ宿発産直住宅です」

今野代表は、特に木に関する専門知識を学んだわけではないのだそうだ。「情熱があって、それを支えてくれる仲間がいれば、何とかなるものなんですね」。

ビジネスとしての自立をめざして。

現在では屋号看板のみならず、地元の間伐材を利用したキット式ハウス(組立ハウス)、長火鉢の販売も手がけるようになった『八吾作』。また今年には、一般の人々を対象にした林業体験イベントも予定しているなど、彼らの活動はますます広がっていきそう。「でも、『八吾作』はあくまで町の良さを発信していくための表現に過ぎません。今後も新しいアイデアをどんどん実現させていきたいと思っています。そのためにも、とにかくビジネスとして自立させていくことが先決でしょう」と吉田さん。

さまざまな職種と技能、知恵、人材が結集する『八吾作』は、真剣に、町の未来を見つめていた。地域に浸透し、静かな広がりをみせる屋号看板も、彼らの真剣さがなければこうはいかなかったに違いない。それは、まさにビジネスである。「小さな一歩かもしれないが、七ケ宿の歴史にとって大きな一歩になるよう、これからもシビアに『八吾作』の展開を考えていきたいですね」と話す今野さんの表情は、力強くやる気に満ちあふれていた。

■屋号看板社『八吾作』
問い合わせ・注文
☎0224(37)2568

この町に息づく深い歴史の魅力は、足早の旅では見えてこないんですよ。

【登米町】ママさんガイドサービス 酒井 哲雄さん

パパさんガイド出動!

今も藩政時代の雰囲気があちらこちらに息づく登米町。一方で、明治時代の洋風建築が残り、レトロな雰囲気も漂う。この町で生まれ、この町に住み続ける酒井哲雄さんは、ママさんガイドサービスに参加するようになって二年目になる。あれ、ママさんなのに男性?「今から十六年ほど前、町の文化財を観光資源として活用し、活性化を図ろうという『みやぎの明治村構想』が掲げられました。それで、他所からのお客さんも徐々に増えていったのですが、一般の人たちも何か自分たちで貢献できることはないかと考えた。その延長線上で誕生したのがママさんガイドサービスです。当初は五―六人でやっていたようですが、そのうち手が足りなくなり、パパさんも出動するようになったというわけです」と酒井さん。

酒井さんが参加したきっかけは、町についてあまりに知らない自分に愕然としたから、という。貴重な文化財も、町民にとってはあたりまえに存在しているものに過ぎなかった。「ママさんガイドは知っていたけれど、別に興味なかったんです。ただ、あるとき他所から来た人に登米能のすごさを力説されて、とても恥ずかしかった。なんで私より知ってるんだって。それでママさんガイドの研修会に顔を出すようになったんです」と酒井さん。以来、永く深い歴史に触れることなく、勉強を続けてきた。知れば知るほど、興味がふくらんでいった。町に対する誇りも、以前とは比べものにならないほどになっていった。

ハキハキとよく通る声で話す酒井さん。さすがにプロのガイドである。

お客様の年齢や雰囲気にあわせてガイドの仕方を変えるのが酒井流。瞬時の判断力が問われる。

町を知ることが、誇りや愛着につながる。

「歴史の勉強が好きになったのが、何よりの収穫ですね」と語る酒井さん。最近では、興味が高じて自らガイド用のマニュアル冊子を制作してしまったというからすごい。「調べたことをカタチにしたいという単純な発想。それにお金を頂いている以上、プロとしてきちん

としたガイド技術を身につけていたいですから」と笑顔で話す酒井さんだが、やはり陰では相当な苦労をしているのだ。「うーん、どうなんだろう。私はただ楽しくやってるだけ。性格的にもサービス精神旺盛なタイプなので、むしろ『やらせて頂いてありがとう』という気持ちですよ。自己研鑽という意味でも、よかったですね」

酒井さんはガイドを始めて、改めて気づいたことがある。かつて自分と同じように、町の歴史や文化財について知らない町民が少なくないことだ。「昨年秋のみやぎ国体のとき、選手の方々を案内したんです。ついでというので町内の若い人たちも一緒に来たんですけど、町のこと、本当に知らないんだな。これはさすがにまずいな、と思いましてね。ガイドできるレベルとは言わないが、この町に住んでるんだから、せめてここにある文化財については知っていてほしい。知ることが誇りや愛着につながることは、私が身をもって経験しました」

「お客さんとのコミュニケーションを通して、自身の見識を高めていく必要性を感じますよ」

「ガイドを通して学んだこと、身につけたことを、いつか本にできたらいいね」

から」と、酒井さんは真剣な表情で語る。

ちなみに現在、ガイドさんを募集中である。「この町に限らず、足早の旅では見えないものがいっぱいあります。それを補うのが私たちガイドの役割。大変そうに見えるかもしれませんが、いろんな方々とのコミュニケーションもあるし、自らの見識も高められるし、この経験は必ずプラスになります。旅行者の方も、ガイドの案内を聞けば旅が何倍も楽しくなるはずですよ!」と酒井さん。そのイキイキとした話しぶりから、ガイドサービスへの自信が垣間見えた。

■ママさんガイドサービス

[料金] ガイド一名につき 千人まで二千円、二千一人以上三千円

※時間内に昼食時間をはさむ場合は、ガイド昼食代が別途必要になります

[時間] 約二時間

[問い合わせ・予約]

登米町観光物産協会

☎0220(52)4649

または、

観光物産センター「道山之館」

☎0220(52)5266

登米町

酒井さんが
読者のみなさんを
ご案内

誌上観光体験へ出かけよう!

登米町の歴史を伝える施設を誌上訪問!
でも、やっぱり、実際に訪ねてみるのがいちばんですソ。

【登米町伝統芸能伝承館 森舞台】

はい、ここは230年以上の歴史を持つ「登米能」の保存・伝承を目的として、平成8年に造られた施設ですね。本格的な能舞台、稽古場、展示室などが備えてあります。能が上演されるのは毎年6月と9月。仙台藩では能が盛んでしたが、現在まで民間に伝承しているのは登米だけなんですよ。

【警察資料館】

明治22年に建てられた旧登米警察署は、ポーチやバルコニー付きのハイカラな洋館です。このパトカーと白バイは、サイレンも鳴らせるんですよ。いわゆる取調室として使われていた調所や留置所もおもしろいですが、2階に展示された歴代の警察服も見ごたえありますよ。本当に警察署だったとは思えないでしょ。

【武家屋敷 春蘭亭】

ここは、江戸時代中期の建物を修復したもので、登米伊達初代藩主相模宗直公が、水沢城より登米に移るに伴い移住した鈴木家の屋敷です。付近の武家屋敷と形式が違うのは、こういういわれがあるためなんですね。春蘭茶や抹茶をいただきながら、当時のままの梁や柱を眺めてみてはいかがでしょうか。

【水沢県庁記念館】

明治4年に水沢県庁として建てられたここは、県内の官庁建築物を代表する貴重な建物です。入母屋造りの玄関が堂々としているでしょ。中には洋風建築物もあり、随所に独自の和洋折衷建築の特徴点が見られます。時代により小学校や治安裁判所として使われていたんですよ。

【教育資料館】

明治21年10月に建てられた、旧登米尋常小学校です。当時の洋風学校建築を代表する純木造の2階建で、正面に向かってコの字型に造られています。こだわりの建築技術には、子供たちへのいたわりがみられます。白いバルコニーに立って話した声は学校全体に響き渡ったそうです。